

発表タイトル	松代藩における家老御用部屋記録の研究 —執務日記とその周辺—
発表者所属名	日本文学研究専攻 准教授
発表者氏名	太田 尚宏

アーカイブズ学研究は、アーカイブズ資源研究、アーカイブズ管理研究の2つに大別される。本研究は、アーカイブズ資源研究における組織体論・記録生成論・伝来論に関わり、国文学研究資料館所蔵の信濃国松代真田家文書に残る家老日記を中心とした御用部屋記録について、伝来の特徴を解明し、当該記録の生成・蓄積のあり方の復元を試みる。

松代藩では、執務に即して作成した文書・記録類を各役所が所管する土蔵に分散保管しており、真田家文書には家老・目付・勘定方元々・御側御納戸など、各役所の執務日記が多数残されている。しかし、このうち家老の執務日記のみは、同職を務めた家々にあった「日記 扣」を後日選別して収集したと考えられる状態で残存する。これは明治4年(1871)の廃藩置県で松代城が接收された際に長国寺(真田家の菩提寺)へ移送された「御土蔵日記」や政事所(家老の職務機能を継承)の執務日記が、同5年の火災で焼失したことに関連する。政事所では、灰燼に帰した執務日記を補うため、各家老家から過去の「日記 扣」を提出させ、重複分を整理したうえで保存したと推定される。このため松代藩の家老御用部屋記録の構造を分析するには、このとき収集された「日記 扣」や関連記録などの内容から、往時の御用部屋という組織の事務のあり方を復元していく方法をとる必要がある。

そこで、真田家文書目録で「家老日記」として分類されている日記(国許分)を分析した結果、この分類項目には以下の3つの異なる種類の日記が混在することが判明した。

- ① 御国日記(藩主周辺の動静や主な政務について記載した編纂日記。多くが焼失)
- ② 置附日記(家老御用部屋に設置されていた執務日記。多くが焼失)
- ③ 日記 扣(家老が御用番の際の執務内容を記して各家に保管していた日記)

このうち①は家老の執務日記ではなく、藩の公式な編年体記録というべきもので、②や御側御納戸日記などをもとに編纂され、「御日記御土蔵」に保管されたと考えられる。②が家老御用部屋における執務日記であるが、③に「本帳除」「置附除」「置附写済」といった記載が見られることから、③が②の下帳としての役割を果たし、内容情報の取捨選択が行われたうえで、②へ転記されたと理解することができる。

また、家老の執務日記には「諸用帳」と呼ばれる記録が付随し、処理した案件に関わる願書や口上書などの全文が転写された。「日記 扣」には、「委細諸用帳ニ有之」といった記述が随所に見られ、いわば“見よ項目”のように案件ごとの記録の所在を明示している。これらの“見よ項目”に示された記録の種類は、宝暦期(1751~64)を境として細分化され、処理事案の多様化に応じて、蓄積された情報をテーマごとに整理して別帳仕立てにするなど、御用部屋記録の文書管理方法が変化したことを物語る。